

## この2年間を振り返って

日本板硝子株式会社 技術研究所

長 嶋 廉 仁

### Looking back to past two years

Yukihito Nagashima

*Nippon Sheet Glass Co., Ltd. Technical Research Laboratory*

本誌の編集委員を2年間務めさせて頂き、この3月に後任に道を譲ることになった。長年編集委員をされている方もいらっしゃるが、2年程度で誰か後任を見つけて（押しつけてという方が多分正しいが）任を辞する方が多く、私もそれにならうことにした。まずはこの場を借りて、本誌読者の皆様、記事執筆にご協力いただいた方々並びにお世話になった編集委員の皆様にお礼を申し上げたい。最後の編集委員会で、半ば予想していた通り「最後の仕事に」とコラムの執筆を依頼され、お引き受けしたのが3月。3ヶ月もあれば何か書けるだろうとたかをくくっていたが、特にテーマの決まっていないこのコラムの文章を書くのは予想以上に難しかった。締め切りの6月末となり、あわてて原稿を書き進めなければならない破目となってしまった。何を書こうか随分頭を悩ませたが、この2年間を振り返りながら最近思っていることを書かせて頂く。

さて、ありふれた言葉ではあるが、「激動」の2年間であった。

2年前の年度初めの頃は、経済の停滞が深刻

に考えられてはいたが、振り返ってみれば今ほど深刻には受け止められていなかった。バブル崩壊から10年が経過しようとしており、またアメリカでのIT産業の隆盛もあって、そろそろ景気も回復という雰囲気の色濃く漂っていたように思う。結局それはバブルであり、既にアメリカではバブルははじめていたのだが、少なくとも日本ではまだそのことが十分認識されてはいなかった。弊社では、ITバブルによる一部製品の急激な伸びにより前年度の売り上げ、利益共に増加し、その余韻が残っていた時期であった。「余韻」と後になって振り返ってみれば、そう言わざるを得ない。その結果、この2年間大きな痛手を受け、研究開発面でもずいぶん影響を被った。色々な状況が分かってみればやり過ぎと分かることが、そうと気づかれずに実行されてしまう事がバブルの恐ろしさであると思う。

80年代のバブルの時も、ユーザーの要求によりこれも後になって振り返ってみればやり過ぎと思うような事をせざるを得なくなり、量産体制が出来上がった頃にはできる商品が売れないという事を経験した。バブル崩壊直後、同ユーザー業種に製品を納めていた会社の人と話をした時、「うちの会社では、このような状況がいつまでも続く訳がないと投資をできるだけ抑

えるよう田舎の廃校になった校舎を借り、人海戦術で生産を行って間に合わせた」という話を聞き、そういう会社もあるのかと感心させられたが、このような会社はむしろ珍しかったのではないかと思う。まあ、この会社の製品はアセンブリー中心で、場所さえあれば人海戦術でこなせるということはあった。典型的な装置産業で、増産のためには生産設備を増やさなければならないという宿命を背負ったガラス産業では、人海戦術ではこなせないという難しさはある。今回の経験は、IT産業ではそのユーザーや競合相手は多くが海外にあり、まさにグローバル化という流れとその流れに乗る事の難しさによって会社全体が大きく振り回される経験をさせられた初めての機会であったように思う。

また、2001年9月11日の同時多発テロは信じられない出来事であった。そして、その報復のために行われたアフガン戦争、今年に入っているイラク戦争も記憶に新しい。今までずっと火種の消えたことのない国際紛争ではあるが、軍事力のバランスが崩れた冷戦後の体制の中で、新しい形の紛争が生まれ、そして海外での紛争はこれまで以上に日本経済そして企業業績に影響を与えるようになったような気がする。そのためか、これまで以上に世界での出来事に敏感になったし、また研究開発の仕事に取り組む上でもそうであらねばと思う。

この2年間、幸いなことに3度の海外出張の機会を得、ヨーロッパ4カ国と台湾を訪問した。ヨーロッパ訪問では、同じガラス業界でもこれほど産業や研究開発に対する考え方、取り組み方が違うのかと、まさに文化の違いを肌で感じさせられた。また、ICG会長であるDGG（ドイツガラス技術協会）のDr. Schaefferの言葉として印象に残っているが、ヨーロッパのガラス業界は「コミュニティ（共同体）」であるということも良く分かった。産官学の連携はもとより、各国間の共同も当たり前のように行われている。あるいは、ヨーロッパの企業は、これまで以上に日本に注目するようになったと

も感じる。その動きには今まで以上に目を光らせなければならないと、文献ばかりではなく特許にも今まで以上に注意を払うようになった。台湾では、ディスプレイ産業の一部を垣間見ただけであったが、技術の完成度は高くないものの、その技術の不足を力づくで乗り越えてしまうバイタリティーには圧倒された。あのパワーに立ち向かうにはどうすればよいのだろうか、深く考えさせられて帰ってきた。グローバル化、大競争時代と言葉にするのは簡単だが、大変な時代に生きているということを改めて感じさせられた経験であった。

また、最近のSARS騒ぎでは、東南アジアに生産拠点をもち、またユーザーの多くが台湾にある事業部門を持つ弊社でも、危機管理部門から矢継ぎ早に対策、対応の指示が出され、「ベトナムに行っている誰それは大丈夫だろうか」とか、「売り込みに台湾に行きたいが出張禁止で行けない」とかいう会話が飛び交った。また、中国から送られてきた荷物を前に、「この荷物開けても大丈夫だろうか」と心配した今では笑えるような出来事もあった。ここでも、グローバル化というものをイヤでも感じさせられることとなった。

話は変わって、この2年間で大きく変わったものに、環境に対する意識、取り組みがある。私の勤務する研究所でも、ダイオキシン問題から焼却炉が使用停止となり、紙類は全て回収されるようになった。今まで何も考えることなくゴミ箱に捨てていたものを、一々これは再生用、これは回収用と分けてそれぞれ別の場所に整理して出さなければならない。また、ゼロエミッションを目標に、その他の廃棄物も全て分別回収されている。これは、実感から言うると実に不便なものである。また、持ち込んだゴミは持ち帰るということになり、これまで当たり前のように持ち込み、空になったら捨てていたペットボトル入り飲料の空きビンも、持ち帰らなければならない。（おまけに、家に持ち帰っても自治体はペットボトルの空きビンを回収し

なくなったので、スーパーなどの回収ボックスまで持って行かなければならない。) これも、結構面倒なものである。しかし、こうして不便、面倒と思うことによって、無駄なごみを出すことはずいぶん減ったのではないかと思う。また、今まで便利、快適に暮らすためにどれだけの犠牲を払ってきたかということを改めて自覚する良い機会ともなった。今後開発するものは、こうした環境への影響や、リサイクル性を良く考えて製品化しなければならないと実感させられる。

また、研究テーマの中に、有害物フリー、リサイクルなどを目的としたものが増えた。中々同じ効果が得られる代替成分が見つからず、有害物は最近になって急に有害になった訳ではなく昔から有害なのであって、昔の人がそれを承知で使ったのはそれなりに必然性があったのだと改めて納得させられるものもあって、開発に苦労したものもある。しかし、環境重視の世の

中は待った無しで到来しつつあり、これらの環境絡みのテーマの重要性は日毎に増しつつある。

取り留めないことを書きつづってきたが、わずか2年間であるがこうして振り返って見ると、改めて感じさせられるのは変化というもの。急激に、そして予想もしていなかった速さで起こることがあるということである。しかし、またその急激と思える変化にも必ず兆しというものがある。そのような変化の兆しを逃すことなく捕らえ、すかさずそれに応じた対応をとることがこれまで以上に求められている。そして、研究開発にも同じことが言えるのではないだろうか。最近読んだ本に、これまでの世の中では物事は唯物的に考えれば事は済んだが、これからは感性で物事を考えていかなければならないというようなことが書いてあった。まさに、研究開発にも唯物的から感性的への変化が求められている。

#### ニューガラスフォームページのご案内

②ニューガラスフォーラムでは下記のホームページを開設しております。

<http://www.neg.or.jp> 是非一度アクセスして下さい。

1. NGF の開催する各種研究会・研修会のご案内が出ています。
2. 機関誌「NEW GLASS」の目次及び2年以前は内容がPDF化されています。
3. 「ガラス用語集」「ガラス物性測定方法集」等も纏められています。
4. NGF の定款・組織・会員等が「事務局だより」にあります。
5. 関連の学会・行事等をお知らせするイベントカレンダーが新設されました。